

17 精神分析的カウンセリング

蔭山昌弘

1 到達目標

- (1) 精神分析の考える心の構造・発達理論（性格形成理論）・自我の防衛機制を学ぶ。
- (2) 意識と無意識を「間違い」行為・夢・自由連想を通して学ぶ。
- (3) 精神分析の考え方をを用いて、不適応を起こした子どもへの対応を学ぶ。
- (4) 精神分析の考え方を教育現場でどのように活かしたらいいか、その方法を学ぶ。

【キーワード】

意識， 無意識， 自我， 超自我， エス， 口愛期， 肛門期， 男根期， 潜伏期， 性器期， 固着， 退行， 自我の防衛機制， 「間違い」， 行為， 夢， 自由連想， 洞察， 自己分析

2 精神分析的視点からの人間観

パニック障害と診断され外出もままならなかった 20 代前半の女性と、毎月一度のカウンセリングを行って 1 年半ほどたった頃、面接場面で彼女が「喉元に包丁を突きつけられる夢を見た」と告げてきた。私が「もしかしたらあなたには、このことは口に出してはいけないというような何かがあるのかもしれないね」と言うと、しばらく考えて、突然「そういえば、今急に思い出したんですけど、私、小学校の時、学校で事件に巻き込まれ、そのことを担任の先生から、これはあなたと私の二人だけの心にしまっておきましょう、親にも友だちにも誰にも言わないでおきましょうねって、言われたことがあったんです。今まで十数年、全く記憶の外にあって忘れていたんです。今先生から聞かれて、本当に突然思い出したんです」と驚いた様子で口にした。その時を境に、彼女は心の中にあるものを次々に言葉にして話し、やがて家を出て社会生活を普通に営むことができるようになった。

この女性を A 子さんと呼ぶことにする。A 子さんの心の奥に自分自身でさえ気づかずにいた何か潜んでいて、そこを震源地の一つとして様々な症状が引き起こされていたと考えることができる。この当人自身でさえ気づかずにいる心の奥に潜むものを無意識と呼び、これが人間の意識や行動を動かす土台になっていると考える。このようにして人間の考えや行動を理解し、そこから対応を検討していくのが精神分析的カウンセリングである。

ところで精神分析とは何かと問うと次の 3 点に定義づけられる。第 1 は人間の言動の奥に潜む無意識的意味を理解しようとする方法。第 2 に自由連想や夢分析などを用いてクライアントの症状の治療を行う治療方法。第 3 にこれらによって明らかになった理論である。

学校現場では、不適応や問題行動を起こす子どもの心を理解するために役立てたり、治

療の一方法として用いたり、子どもの成長発達をサポートする考え方として用いたりする。

3 精神分析の考える心の構造

精神分析の理論を初めて世に表した人は、フロイト（1856～1939）である。

フロイトは、心は意識・前意識・無意識から成ると考えた。意識は自分で意識できる部分であり、無意識は自分でも意識できない部分、自分でも気づいていない部分をさす。それに対して前意識は、度忘れして思い出せない人の名前のように、忘れていたりして意識できずにいるが、思い出そうとして考えていると思い出すことができるものをいう。

フロイトはやがて心の構造を、自我・超自我・エス（イド）から成ると考えるようになった。自我とは、自分でこれが私だと思っているもので心の主体となるもの。超自我とは、心の中にあって良心の声に該当するものであり、意識の範疇で考えると、理想とかこうありたい自分、こうあってはいけない道徳的な自分などをさす。この超自我は無意識の中にもあって、自分では自覚のないまま、こうあらねばならないとかこうしてはならないなどといった声として潜んでいる。この無意識の中に潜む超自我が様々な形で主体者である当人の心を苦しめると考える。一方、エスは、快楽原則にのっとなって様々な欲動を充たそうとするもので、無意識の中にある。以上から、自我は、心の中の超自我とエス、そして現実の外界、この三者の要求を調整し、三者と関わりながら存在していると考えるのである。

4 精神分析の考える発達理論（性格形成）

フロイトは、欲望充足を求めるエネルギーを広い意味での性的エネルギーと考え、リビドーと名付けた。年齢的な成長と体の発達に伴って性的エネルギーの向けられる場所は変化していき、欲求の充たされ方の違いが性格形成に大きな影響を与えると考えたのである。

（1）発達段階

①口愛期と口愛性格（0歳～1歳半頃）

乳児が母親の乳を吸って大きくなる時で、口唇期とも呼ぶ。授乳は生存に必要な食欲を充たすためだけでなく、母親に抱かれて乳房を吸うことで快感を体験する時でもある。従って、充分飲んで抱っこ（スキンシップ）された乳児は、惜しみなく与える母親を取り入れて、物惜しみのない慈愛的な性格や、吸い取る力が発達して知識欲や進取の性格などが形成されると考えられる。一方、充分乳を飲ませてもらえなかったり抱っこされなかったりした場合、依存的な愛情欲求を抱いて、自己犠牲を図ってでも他者に愛されようと努めたりすることがある。8ヵ月を過ぎる頃になると歯が生え始めて離乳の時期を迎える。歯が生えると能動性が生まれ、母親の乳房をギュッとかんで攻撃性を充たそうとする。母親は自分を育ててくれる存在であるにもかかわらず、その相手に攻撃を仕掛けることになる。さらに、抱いていてほしい母親から離乳を通して分離する。このように相反する感情を母親に向けることになる時期であるため、攻撃欲求をある程度充たしてやりながら、時間をかけて徐々に離乳させることが必要だと考えられる。無理な離乳をさせると、渴望感が残って、食べ物への食欲さや意地汚さが作られ、いつまでも離乳を図らずにいると依存心の

強い甘えっ子性格が作られやすいと言われる。

②肛門期と肛門期的性格（1歳半～3歳頃）

おむつが取れて自分一人で排泄できるようになる時期をさす。排泄のしつけを厳しくしすぎると、物や愛情を出すのを惜しむ性格や「しまりや」の性格が作られやすく、一方、しつけがルーズで放任されていると、気持ち悪さからくる諦めなどから、「無気力」「しまりのない子」などの性格が作られると言われる。肛門の括約筋が発達し排泄のコントロールができるようになるということは、幼児が自分の能力を発揮する喜びを感じる時でもある。従って、親が子どもの排泄リズムを無視したり強制したりせず、子どもの思いを尊重して対応すると、それまでの自己愛的な愛を親に向けていくことができると考えられる。

③男根期と男根期的性格（4歳～5歳頃）

4、5歳になると、子どもは自分の性器に触れることに快さを感じるとともに、自分の体にペニスがあるかないかを意識して、男か女かという性の違いを自覚すると考えられる。

男児の場合、初めて意識する異性としての母親の愛を独占したいと考える。ところがその思いを疎外する潜在的な脅威として父親を捉え、父親を邪魔者のように思う。しかし父親の方が自分よりも強くてかなわないと思ひ、父親を邪魔者に思うことに罪悪感を感じる。無意識のうちに行われるこの心のもがきをフロイトはエディプスコンプレックスと名付けた。やがて父親を排除したいという思いや母親と結ばれたいとの思いを諦め、エディプスコンプレックスは解消される。また、このような思いを持つことによる父親からの懲罰を恐れ、ペニスを切り取られてしまうのではないかと不安を抱く。これが去勢不安であり、母親と結ばれたい思いを諦める要因の一つと考えられている。

一方女兒の場合は、父親の愛を得たいと思ひ母親をライバル視する。女兒のこの心の動きをエレクトラコンプレックスと呼ぶ。男児の去勢不安に対して女兒の場合は、すでに切り取られてしまったものとして劣等感を形成しやすい。今まで慕ってきた母親をライバル視することになるわけで、女兒の心を複雑なものにする一因と考えられている。

④潜伏期（6歳～小学生時代）

男根期の親への執着を断念し、同年代の友だちとの関係や、知的な学習活動や、学校での活動、スポーツ、社会的な活動などに関心が向けられていく時期である。性的欲求の発達は一時期休止し、やがて次の思春期に性器期的性格として発達すると考えられている。

男根期での親との関わりは様々な形で超自我に取り入れられ、性格の大きな部分を形成すると考えられる。例えば男児の場合、言葉や態度に一貫性があり寛大な父親に育てられると、父親のようになろうとし、摂取することで超自我が形成されるが、厳しすぎる父親に対すると、無力感や逆に暴虐な超自我が作られてしまうことがある。

一方女兒は、切り取られてしまった劣等感が、父親から愛されることによって自己肯定感に変わっていくと考えられる。何らかの理由で父親から愛されないと、劣等感は強化され、向上心の放棄や男性への反抗心や前段階への退行などといった形で表れることがある。

⑤性器期（思春期）

思春期になると、休止していたリビドー的な性的エネルギーが性器に集中し、性器の結合をめざすようになる。そして、異性とは違った自分の性的アイデンティティを自覚して大人へのステップを踏んでいくと考えられる。

（２）固着と退行

全ての人が前述の発達理論通りに成長していくわけではない。発達のある段階で、過度の欲求充足（例えばいつまでも離乳できなかつたこと）や、過度の欲求不充足（例えば早すぎる離乳）などがあつた場合、その段階の痕跡を引きずり残し続けることがある。これを固着という。例えば、口愛期に満足を得られずに育つて大人になつた人が、強い内向性や不安感を抱くなどという例が考えられる。また、ある段階に達しているのに、何らかの出来事が引き金になつて精神的にそれ以前の段階に戻つてしまう状態を退行という。退行は固着点に戻つてしまうのが多いのだが、これは後戻りすることによって不安を解消し、欲求を満たそうとしているとも考えられる。退行には、小学生の指しゃぶり、「赤ちゃん返り」などから、神経症や精神病といった病的な症状に至るまで、様々な例が考えられる。

（３）性格について

以上がフロイトの考えた発達理論であるが、これらは無意識のうちに行われるため自覚されない場合が大半である。なお、性格を考える上で注意しなければならないことがある。それは、性格は個性であり良い悪いの価値を含むものではないという点である。例えば、消極的で静かな子が「自分はダメだ」と否定的に捉えている姿をよく見かけるが、消極的で静かな子が、自制心と深い洞察力を持ち責任感が強いなどという例は無数にある。一方、明朗で積極的な子が、おっちょこちょいで責任感に欠けるなどといった例も多く見られる。いずれも個性の違いであつて価値の差はないと受けとめることが大切である。とりわけ、自己否定感を持つ子どもに対する時、性格を個性として認識させることが重要な点になる。

5 自我の防衛機制

自我は心の中の超自我とエスそして外界、この三者との関わりにおいて存在している。だから、外界に適応しようとして外界の要求に応えたり、「こうあらねばならない」とか「こうしてはならない」といった超自我の命令に従つたり、エスの欲望をコントロールしたりと、この三者からの要求に板挟み状態になっている。従つて、その不安定な状態において、自我は次の方法で自分を守っていると考えることができる。これを自我の防衛機制という。

- a. 抑圧 …認めたくないことを無意識の中に入れて、思い出さないようにする。
- b. 抵抗 …無意識を意識化させることを妨げる。(例) 相手に対して正直であらうとするが、言い間違いや言い淀みが生じてしまう。
- c. 否認 …現実を認めない。(例) 交通事故の死亡現場にショックを受けるが、自分には関係ないと決め、パニック状態にならずに運転を続けて横を通り抜ける。
- d. 分離 …ある考えや行動と、結びついている感情とを切り離す。(例) 体験した「思い

出したくない」話を他人事のように話す。

- e. 逃避 …不安を喚起する場面や不適応場面から逃げようとする。
- f. 退行 …幼少期の未熟な行動にもどる無意識行為。(例) 赤ちゃん返り・指しゃぶり
- g. 反動形成 …ある欲望を抑圧して反動として反対の行為を行う。(例) 大好きな異性への恋心を隠して嫌がらせをする。
- h. 投影 …認めがたい抑圧した感情を他者の感情だと見なす。それによって自分の罪悪感や責任感から逃れようとする。(例) 子どもを無意識的に拒否している母親が「私はこの子がかわいくてしかたないのですが、この子はどういうわけか私を嫌っているのです」と言う。
- i. 同一化 …優れた人と自分とを同一視し自分の価値を増大させる。
- j. 摂取 …他者の持つ特徴を無意識のうちに自分の中に取り入れる。同一化の基になるもの。(例) 尊敬する先輩の考え方を自分の考え方として取り入れる。
- k. 代理 …受け入れ難い感情・欲求を受け入れ易い対象に振り向ける。(置き換え)
- l. 象徴 …思いや願いを形あるものに置き換える(代理・置き換え)
- m. 合理化 …力不足や失敗を認めずもっともらしい理由で正当化する。(例) イソップ物語の「すっぱい葡萄」。
- n. 感情転移 …父母など重要な関わりを持つ人への感情を第三者に向ける。好意を向ける場合が陽性の転移。消極的・否定的感情を向けるのが陰性転移。
(例) 患者が幼児期に親に甘えた感情を治療者に向けて依存的になる。
また、親に甘えられなかった反発を治療者に向けて反抗的になる。
- o. 昇華 …文化的・社会的に受け入れられない欲求を受け入れられる形に置き換える。
(例) 攻撃的エネルギーや他者への競争心をスポーツや勉強に向ける。

6 意識と無意識

私たちは日常、様々なものを目にしているが、見えているけれど一部分しか見ていない。目や耳で注意を向けた部分だけを意識で捉え、それが自分の認識の全てであるかのように思っているが、実は意識化されない非常に多くの部分を持ちながら生活しているのである。このように意識では気づいていない無意識が、現実の自分の思考や行動を左右していると精神分析では考える。ではその無意識をどうやって知ることができるのか。

(1) 「間違い」行為

言い間違い・書き間違い・聞き間違い・読み間違い・ど忘れ・置き忘れ。これらの中には、心の中のどこかに、その行為をさせたくない思いが潜んでいる場合がある。例えば、上りの電車に乗ろうとしてあわてて下りの電車に飛び乗ってしまったなどという行為の奥に、上り方面へ行きたくない無意識の動きなどが潜む場合がある。また「ど忘れ」なども同様で、思い出したくない無意識が潜んでいて思い出せない場合がある。ただし、このような「間違い」行為に常に無意識が潜んでいるというわけではない。

(2) 夢

フロイトは、夢を抑圧された願望の充足と考えた。睡眠中は意識と無意識の間の蓋が弛んでいるため、無意識の中に抑圧されていた願望や欲求が意識に上ってくる。ところが意識に浮上しようとする時、願望などをストレートに浮上させまいとして夢の中で検閲作業が働き、複数の要素が合成されて一つに凝縮されたり、異なるものに移動したり、抽象的な概念が視覚化されたり、さらにこれらがまとめられて二次加工されたりして、夢がわかりにくくなって出てくると考えたのである。従って、夢に登場する内容を象徴として理解したり、夢見者の連想や前日の出来事などを総合しながら、変形や歪曲された内容を逆戻りして、無意識のメッセージをくみ取ろうとする作業が夢分析である。

一方、フロイトと時代を共にしながらも、フロイトとは異なる方法で夢分析を考えたのがユングであった。ユングは、夢は願望充足だけでなく、意識的な状態の偏りを補う補償的な役割を果たすものもあると考えた。さらに、単純な補償や逆補償、未来へのビジョンなどを提出する展望的なもの、警告夢、予知夢など、様々な形の夢があると考えたのである。ユングは、個々人が親や環境によって作られた無意識とは別に、多くの人に共通する普遍的無意識と呼べるものが潜んでおり、これが個々人の意識にも強い影響を与えていると考えた。さらに、世界各地の神話やお伽話などに共通してみられる普遍的なイメージの源泉として元型という概念を考え、その主なものに、影（シャドウ）、アニマ、アニムス、老賢者、太母（グレートマザー）、自己（セルフ）などを考えた。これらが、夢の中にも様々な形を伴って現れるとした。従って、ユング理論による夢分析は、これら元型の意味や様々な象徴の意味を理解したうえで進めていくのである。

(3) 自由連想

自由連想法と呼ばれる治療方法は、精神分析をもって治療に当たる場合に主として行われる技法である。クライアントは、一定時間（50分ほど）、頭に浮かぶ全てのことを話し、カウンセラーがメモを取ったりしながら聴く。その話の中に幾箇所か無意識が顔を出してくるので、その無意識をカウンセラーが聴き取って、治療に活かすのである。

精神分析では、以上の三点において、無意識を知ることができる考える。

7 精神分析を基にした対応（治療）

医師の行う精神分析療法と、精神分析の考え方を土台にした精神分析的カウンセリングとは、理論や考え方に違いはないが治療場面での用い方には相違点が多い。本稿は教育現場で役立つ方法として、精神分析の考え方や技法を基にした生徒との対応という視点で記述する。まず冒頭に述べたA子さんとのカウンセリングを例にして綴ってみる。

Aさんは二人姉妹の長女。外出しようとする不安になって家から出られなくなる。自分でもわけがわからない不安に襲われ、母親がそばにいないと不安になったり、逆に母親が急に煩わしく思えたりするという。そこで「お母さんの思い出」という書き出しで、小さな頃のお母さんの思い出をノートに綴ってもらった。この時、頭に浮かぶことは全て書き留めてほしい、どんな内容であっても全て言葉にしてほしい旨を伝えた。自由連想の援用である。面接は毎月一度行い、ノートに書かれた内容を話題にして話し合

った。何回かの面接を経た時、A子さんは突然次の事柄を思い出したと報告した。

小学校一年生の時、学校から戻ると一歳半ほどの妹がお母さんの膝に入って遊んでいた。自分も遊んでほしかったけれど言えずに我慢して宿題をやった。すると、お姉ちゃんが帰ってきたからと言って妹をA子さんに預けて、お母さんはテレビを見始めた。妹はA子さんに遊びを求めてくる。宿題があるからと払いのけると妹が泣き出した。するとお母さんが、泣かせちゃダメでしょうとA子さんを責めた。仕方なく宿題をやめて妹と遊んだ。そこでその時の気持ちを考えてもらおうと、妹が憎らしい、でも寄ってきて体に触れてくるとかわいい、お母さんには遊んでほしいけれど言えずに寂しいと言う。

さらに面接を重ねると、A子さんは次のように言った。小学校に上がったばかりで不安でお母さんに支えてほしいのに、お母さんに相手にされず、妹が甘えるのを見るだけの自分は不憫だった。そればかりか、我慢して、妹を可愛がることによってお母さんの愛を得ようとしていた。妹が憎い。しかしかわいい。親の愛を得るためにはその妹を可愛がるしかない。自分は我慢して親に気に入られる良い子でいなければならない。これらの思いが心の奥に渦巻いていた。そして、家でも学校でも良い子でいた。この心の矛盾した状態が高校生の時までずっと続いた。だからいつもどこかしら不安で、何かに反発しようとしていた。今まで全く気づかずに来たけれど今そのことに気がついたと。

このように、自分では気づかずにいた苦しみの正体に気づくことを洞察という。精神分析では、無意識に抑圧されている事柄を洞察し、意識化することによって症状の回復を図ろうとする。一般的な治療場面ではカウンセラーが解釈して気づかせるのだが、学校の中でカウンセリングを行う場合は時間的な余裕があるので、可能な限り解釈は避けて生徒が気づくのを待つかまたはヒントを与えて自分で気づくように仕向けるのがよい。A子さんは今まで気づかずに来たことを意識化することができた。しかしそれだけでは回復しなかった。母親に甘えたかった思いを過去の母親に取り戻すことは不可能であるため、現実の母親に甘えを求めた。母親にそばに寝てもらったり、スキンシップを求めたり、大人の自分としては恥ずかしいと言いながら、一時的退行に身を委ねた。

さらに、父親に対しても幼児期に関わってもらえなかった不満のあることがわかった。面接を重ねるうち、治療者（男性）の期待を裏切らないようにしたいとの思いが表れてきた。これは感情転移という心の動きであって、父親から得られずにきた愛を現実の治療者に向けたものである。治療者はA子さんの思いを受けとめながら、充たされずにきた父親への思いに気づかせようと、「父親の思い出」を綴らせた。

こうしてカウンセリングを始めて1年半ほどたった頃、「喉元に包丁を突きつけられる夢を見た」のであった。面接が進み、A子さんの無意識が「もうこの問題に触れても大丈夫だよ」と、夢を通して抑圧されていたものを意識に上らせたかのような内容であった。

以後さらにカウンセリングは続けられたが、途中で何回か、「連想ができない」とか「夢が思い出せない」という場面があった。これは抵抗とあって、無意識が意識化されるのを避けようとする無意識的行為と考えることができる。この場合は無理に進まず、「きっとあなたの無意識はそのことをまだ思い出したくないのでしょう。必要な時だとあなたの無意識が判断すれば、必ず意識に上ってくるのでその時を待ちましょう」と言って対応した。

A子さんは、このようなカウンセリングと医者の方から処方する薬と家族の支えを受けて回復し、社会復帰することができた。

8 教育現場でどのように活かしたらいいか

(1) 生徒理解への援用

意識と無意識、性格形成と発達理論、自我の防衛機制。これら精神分析の理論は、カウンセリング場面だけでなく、日常の生徒理解においても大変役立つ考え方である。

子どもは、自分でも自覚できない抑圧されたものが心の奥にあってもがく。そのものがきをコントロールできないから「問題行動」を起こす。つまり、A・S・ニールが言うように「困った子どもというのは実は不幸な子ども」(『問題の子ども』)であり、「困っている子」なのである。ところが学校でも家庭でも、問題を起こす子どもを「困った子」として捉え、内面において「困っている子」として理解することが少ない。だから子どもたちはいっそう孤立感を深めるのである。

いじめを繰り返していた子がかつていじめられた子であったとか、年配の男性教師にむやみに反抗する中学生が、父親に恨みを抱いていてその代理として教師に反抗していたといったことなどがよく見られる。このような子どもたちの言動の奥に潜むものを感じ取ることによって、子どもたちの心を理解し、成長・発達を支えていこうとする、その礎に当たる心の捉え方が精神分析の考え方だと言えよう。

(2) 思春期における自己構築への支援

思春期は第二の誕生期とも言われる。今までの子どもの自分を壊して新たな大人としての自分を作り上げる時期である。従って、この時期に不適応や「問題行動」を起こした場合、現実への適応を求めだけでなく新たな自分作りを支援するといった側面も必要である。その場合、学校でのカウンセリングは時間的な余裕があるため、自分の生い立ちや性格形成を考えさせ、好ましい自分の姿を描かせるなど、継続的な援助を行うことができる。さらに、不適応を起こしていない生徒であっても、自分の過去を考え、新たな自分作りを模索するための援助を、精神分析を用いたカウンセリングによって行うことができる。

(3) 自由連想・夢分析を用いた面接

例えば親に対する思いを綴ることなど、自由連想の援用は、問題の本質に迫ることができるだけでなく、自分の心の奥を見つめ、カタルシスの役割も果たすことができる。

夢分析は、心の奥に潜む無意識を知る手だてになる。夢分析の習熟には訓練を要するが、夢解釈に走らず、夢内容や登場人物などについての連想を語ってもらい、生徒の無意識のメッセージをカウンセラーと一緒に考えあうことは可能である。人間の心の奥には自然治癒力や人間力とも呼ぶことのできる力が潜んでいるので、夢を言葉にすることで無意識が刺激され、奥に潜む人間力が動き出す。その力を信じ、その力に依拠することによって、少しずつ生徒の心が変化していく。その助けを夢分析は担うことができると言えよう。

(4) 教師自身の自己分析

「あの子どもはどうも私と合わない」とか「あの生徒の仕草が気に障って仕方ない」とか言う場合、教師自身の無意識に、その生徒の持つ性格などに対する反発が潜む場合がある。

例えば、親に甘えることができずに育った教師が、甘え上手な生徒を見るとなんとなくいらいらしたりするなどということはよく見られる。このような場合、教師が「なぜいらつくのか」と自分を深く分析することで自分自身の抑圧しているものが見えてくる。そのように、精神分析の考え方をを用いて、教師自身が自己分析し、自己理解を深めることによって、子どもたちと触れ合う日常の教育活動をより円滑に進めることができる。

9 精神分析を用いるときの留意点

精神分析を学ぶ人が、時に、解釈に囚われてクライアントの葛藤の本質を見失うことがある。従って、解釈しながらも解釈に囚われず、クライアントの心をありのままに見つめ、受けとめようとするのが肝要である。人間が人間をわかりきることはできない。しかしわかろうとすることはできる。わかろうとしてひたむきに真剣に話を聴く姿勢が、相手との心のパイプを結ぶ唯一の道だと自戒して対応することが大切である。

10 演習

(事例) ある年の6月、高校3年の女子が相談に来た。状況を聞くと次のように語った。

①体調が悪い。食事が十分食べられない。食べると気持ち悪くなる。吐き気がする。しかし、吐くことはない。②家を出ると不安になる。途中で倒れるのではないかと感じてしまう。③学校へは2年生の3学期になってから行ったり行かなかったり。3年生には進級できたが、4、5月と合わせて12日欠席。6月になって不登校。④部活動は、園芸部。友人は2～3人。⑤医者には行っていない。

家庭環境は、父(会社員)母(会社員)妹(中学2年生、小学校6年生)。小学校・中学校と成績優秀。先生からの信頼厚く、学級委員をずっと経験。妹たちの面倒をよく見た。中学生の頃から、母親が仕事で忙しい時は夕食の支度をして妹たちに食事を食べさせた。小学校低学年の頃までは母のしつけが厳しかった。父は会社で、ほとんど家にいなかった。小学校高学年になる頃から父が怖くなった。父が、母や妹を怒っていても、自分が怒られているようで、怖い。このまま家から出られなくなるのではないかと不安。

母親との面接によってわかったこと

父一同居の実母が存命中は、子どもたちに対して特に厳しいわけではなかったが、本生徒が小学校中学年の頃、実母が亡くなり、それをきっかけにして、父親が家の中で専制支配的になった。母-子どもが小さな頃は、子育ての全責任を負わされていると考え、「厳しく」育てた。祖母生前は祖母に支配され、死後は夫に支配される感じだった。自由に自己主張できなかった。

設問 (1) この生徒の性格はどのようにして作られたと考えられるか、父母との関わりを中心に、精神分析の視点から述べなさい。

(2) あなたが学校で相談を受ける立場の人間だとして、この生徒にどのように関わっていったらいいのか説明しなさい。

《参考引用文献》

蔭山昌弘『現場教師のための学校カウンセリング入門』黎明書房，1997

蔭山昌弘『思春期トンネル』静岡新聞社，2008

國分康孝『カウンセリングと精神分析』誠信書房，1982

春口徳雄編著『ロールレタリングの理論と実際』チーム医療，1995

米山正信『教師のための実例による精神分析入門』黎明書房，1988